第９課　新約時代の教会の奉仕

【暗唱聖句】

**「みなしごや、やもめが困っているときに世話をし、世の汚れに染まらないように自分を守ること、これこそ父である神の御前に清く汚れのない信心です」ヤコブの手紙1章 27節**

【日曜日・新しい種類の共同体】

**「信者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合った。そして、毎日ひたすら心を一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。こうして、主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされたのである」使徒2：44～47**

イエス様が昇天された10日後に、聖霊を祈り求めて集まる小さな群れの上に、約束の聖霊が注がれ教会は急激に成長し始めます。使徒たちを通して多くの不思議な業としるしが行われていく一方、信者たちには持ち物を共有し、一つになって助け合っていく共同体を作り上げていきます。

神様のみ業は力ある業と愛の業の2つの側面から現わされ、それが初代教会を特徴づけ、神様は生きておられることを証していったのでした。現代教会も聖霊に導かれるとき、神様の愛と力ある業が現わされ、神の国を築き上げていくようになります。

**「信じた人々の群れは心も思いも一つにし、一人として持ち物を自分のものだと言う者はなく、すべてを共有していた」使徒言行録4章 32節**

自分の土地を売ってお金に換えて、貧しい人たちに分け与える人までいました。決してそれを強制されたわけではありません。そうせずにはおれなかった。これは初代教会において、聖霊が一人ひとりに働き、一人ひとりの心を動かしていたことをよく表しています。しかし、教会は完全ではありませんでした。次々に人が救われ教会の群れに加わってくる中で、問題も起こり始めます。それは助けを必要としているやもめたちの間に不平等が見られたことでした。そこで生まれたのが執事でした。不完全さを通してさらに神様は理想的な教会へと導いて行かれたのです。

【月曜日・ドルカスの奉仕とあかし】

**「ヤッファにタビタ――訳して言えばドルカス、すなわち「かもしか」――と呼ばれる婦人の弟子がいた。彼女はたくさんの善い行いや施しをしていた」使徒言行録9章 36節**

初代教会においては、弱者に対する奉仕が盛んに行われていましたが、その中でもドルカスという女性がリーダーシップを取りながら、多くの施しをしていました。彼女は弟子と呼ばれていたようです。ところが彼女は病気になって死んでしまうのです。そこでペテロが呼ばれ、生き返るように祈ると彼女は目を覚ましたのでした。このことがより一層、神様が生きておられることを力強く証していったのでした。この一連の出来事からわかることは、まずドルカスの奉仕活動によって多く人々から慕われ、神様を証していたこと。わたしたちもこうありたいものです。二つ目にドルカスのような素晴らしい神様の働きをしている人でも、早くに亡くなってしまうということがあるということ。三つ目に、神様はドルカスを死から復活させることによって、栄光を現わされたことです。つまり、神様の愛と復活の力を現わすためにドルカスが用いられたということです。ドルカスは生きるのも死ぬのも、神様の栄光となりました。

【火曜日・分かち合いの手段としての施し】

**「ただ、わたしたちが貧しい人たちのことを忘れないようにとのことでしたが、これは、ちょうどわたしも心がけてきた点です」ガラテヤの信徒への手紙2章 10節**

教会の中には、ユダヤ人たちだけでなく異邦人たちも加わってきました。それで割礼のことが問題になり、エルサレムにおいて話し合いがもたれたことが記録されています。結論は異邦人は割礼の必要はないということになったのですが、ユダヤ人であろうが、異邦人であろうが、忘れてはならないのが貧しい人たちのことだとパウロは語りました。教会を2分するような、どれほど重要なテーマがあったとしても、それが弱者を忘れて良い理由にはならないということをよく知っていたわけです。それこそ、まさにイエス様が教えられたことでした。また、パウロは知恵をもってこのことを以下のように語っています。

**「あなたがたの現在のゆとりが彼らの欠乏を補えば、いつか彼らのゆとりもあなたがたの欠乏を補うことになり、こうして釣り合いがとれるのです。「多く集めた者も、余ることはなく、わずかしか集めなかった者も、不足することはなかった」と書いてあるとおりです」コリントの信徒への手紙二8：14、15**

人を助けると、それが後になって返ってくることはよくあることです。聖書もそのことを教えています。人を助けることが大切であるのはもちろんですが、同時に助けられる経験によって謙遜と感謝が生まれます。ただ人を助けるときには、見返りを期待することなく行っていくことが大切です。

【水曜日・正しく生き、愛することへのパウロの指針】

**「…自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です」ローマ12：1**

神様を真に礼拝するためには、自分自身を神様におささげする必要があります。ローマ人への手紙12章では、自分自身をささげて生きていくことの具体的な事柄について教えていますが、その中には他者に対する奉仕や励まし、施しなどについても書かれてあります。しかも、単にそれをするのではなく、賜物に応じて熱心に行うようにと書かれてあります。

**「奉仕の賜物を受けていれば奉仕に専念しなさい…施しをする人は惜しまず施し…慈善を行う人は快く行いなさい」ローマ12：7，8**

これらの行為も礼拝と言えます。真の礼拝行為として自分自身を神様にささげることによって、わたしたちは神様と一つになっていきます。すると、神様の御心を生きることが自分の喜びとなっていきます。だから、奉仕することも自然なこととなっていくのです。

【木曜日・「義人」のヤコブ】

**「みなしごや、やもめが困っているときに世話をし、世の汚れに染まらないように自分を守ること、これこそ父である神の御前に清く汚れのない信心です」ヤコブの手紙1章 27節**

ヤコブはイエス様の義兄弟であり、新約聖書の箴言と呼ばれることもあるヤコブの手紙を書いた人物です。ヤコブは初代教会の指導者の一人であり、義人として高く評価され、ヤコブの手紙ではクリスチャンとしてどのように生きるべきか書かれてあります。特に、信仰に伴う行いを強調した点で注目されています。また「貧しい人を差別してはならない」、「神は世の貧しい人たちをあえて選んで、信仰に富ませ、御自身を愛する者に約束された国を、受け継ぐ者となさったではありませんか」と、貧しい人に対してどのように接するべきなのかについても言及しています。そして、父なる神様の御前に清く汚れのない心でいるために、みなしごややもめのように困っている人の世話をすることと、自分の心を世の汚れに染まらないように守ることの大切さを教えています。